

佳作

憧れの道

宮城県塩竈市立第二中学校

2年 根本 理紗子

私がファッションデザイナーになるという夢を抱いたのは、映画「プラダを着た悪魔」を観たことがきっかけでした。画面に映し出される華やかで、それでいて厳しいファッション業界の世界に、まず心を奪われました。

しかし、それ以上に私の心を強く動かしたのは、主人公のアンディが、ファッションの世界に飛び込み、戸惑いながらも、自分なりのやり方で成長していく姿でした。彼女が仕事を通して洗練され、自信を身につけていく様子は、私に「服は、その人の内面を映し出し、生き方を語るものなのだ」という大きな気づきを与えてくれました。私もいつか、誰かの人生に寄り添い、その人自身を輝かせるような、そんな特別な1着を作ってみたいと思うようになったのです。

この夢を追いかけようと決心し、最初に私が始めたのは、映画に出てくるようなすてきなデザイン画を描くことでした。しかし、いざスケッチブックに向かってみると、頭の中にある漠然としたイメージを、具体的な線や色で表現するのが、こんなにも難しいとっていなかったのが難渋しました。雑誌やインターネットで見た服を真似して描いても、どこかバランスが悪く、服の構造や体の動きを理解していなければ、本当の意味でデザインはできないのだと、痛感しました。

次に、母に借りたミシンで古い服をリメイクしようと試みましたが、まっすぐ縫うことすら難しく、生地がよれたり、縫い目がずれたりするばかり。思い描いていたような服は完成せず、何度か諦めそうになったこともありました。それでも、自分の手で布が形になっていくことが楽しくて、「もっと上手になりたい」という気持ちが、失敗を恐れる気持ちよりもずっと強くなりました。

失敗を重ねるうちに、私はあることに気づきました。それは、ファッションデザイナーになるということは、単に絵が上手で、ミシンが使えるだけでは駄目だということです。服はただの「モノ」ではなく、そこには時代や文化、そして人々の思いが詰まっているのではないかと考えました。

そこで、私は一度、実践的な製作からは離れ、ファッションの歴史を調べてみることにしました。図書館で借りた専門書を読みあさり、ココ・シャネルやクリスチャン・ディオールといった偉大なデザイナーたちの生涯や、彼らがなぜ、その時代にそのデザインを生み出したのかを学びました。

すると、それぞれの服の背景には、社会情勢や文化、人々の価値観が深く関わっていることが分かり、ファッションの奥深さにますます魅了されていきました。また、素材についても興味を持つようになり、コットンやウール、シルクといった素材が持つ特性や、それぞれの手触りや重みも知ることができました。滑らかなシルクの手触りや、ざっくりとしたリネンの風合いに触れるたびに、それぞれの素材が持つ「表情」をどう生かすかを考えるようになりました。

今は、こうした学びを生かし、休日には街へ出て、周りにいる人々の着こなしを観察するなど、身近なところから学びを深める努力を続けています。人々がどんな色を好み、どんな素材の服を着ているのかを、注意深く見るようにしています。

この夢をより確かなものにするため、専門学校で学ぶことを目標として、日々の勉強に励んでいます。この夢を追いかけることは、決して楽な道ではないと理解しています。それでも、私はこの挑戦を通して、技術だけでなく、広い視野や探究心、そして何よりも、「失敗を恐れずに挑戦する心」を育むことができていると実感しています。

将来は、流行を追うだけでなく、着る人の心をそっと包み込み、背中を押ししてくれるような服を作りたいと思っています。そして、いつか自分のデザインした服が、夢の舞台であるパリコレのランウェイを歩くところを見る、という目標もできました。

ファッションには、人の人生を豊かにする力があると信じています。この大きな目標に向かって、これからも私は挑戦を続けていきたいと思います。あの憧れの道を彩れるように。